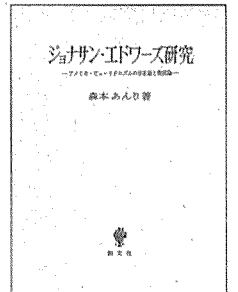


始まりの1冊



四半世紀前に出版された本書を手にとって今感じるのは、寂寥である。自分ももうこれだけの凝集力をもった研究はできないし、これ以上の結果を出すこともできないという、ため息まじりの諦めである。

エドワーズといえば、反知性主義の起点となった信仰復興運動(リバイバル)の指導者だが、当時の私が没頭していたのは、存在の成就と充足を語る彼の幽玄な思想だった。アリストテレスとトマスを受け継ぎつつ、ロックも捨てきれずにいた「実体」概念をきれいさっぱり捨て、存在と行為を同じカテゴリーで語る、彼のダイナミックな自然哲学である。

その論理を捉えようとして、ひたすら格闘していた。自分で理解するだけでなく、それを日本語で説明しなければならぬ。エドワーズに関する邦語文献は何もなかった。そこで、彼の使うさまざまな概念や術語も、自分で編み出さねばならなかった。自信があったわけではない。だが、それをやりとおせるまでは他に何もできない、ここを通らねば、自分の人生はどこにも行き着かない、というこだけわかっていた。

1995年

『ジョナサン・エドワーズ研究』 ——アメリカ・ピューリタニズムの存在論と救済論』



森本 あんりさん

米に息づく反知性主義

同じ年に、ペンシルヴェニア州立大学出版局から英語版が出ていた。こちらも苦勞して書いたはずなのに、そんな記憶はない。プリンストン神学大学院に提出した学位論文を改筆したもので、エドワーズ研究の層がもつとも厚いアメリカで評価されたことは率直に嬉しかった。学会に行けば必ず言及されるし、その分批判もされたが、手応えは十分で、当時の研究者仲間との交流は今も愉しく続いている。

それに比べると、日本語版の方はひたすら苦しく、その

努力も報われなかった。そもそもアメリカという国に見るべき思想があるとは考えられていなかったし、ましてピューリタニズムの神学や哲学に興味をもつ人などいない時代だったので、当然の成り行きだったかもしれない。

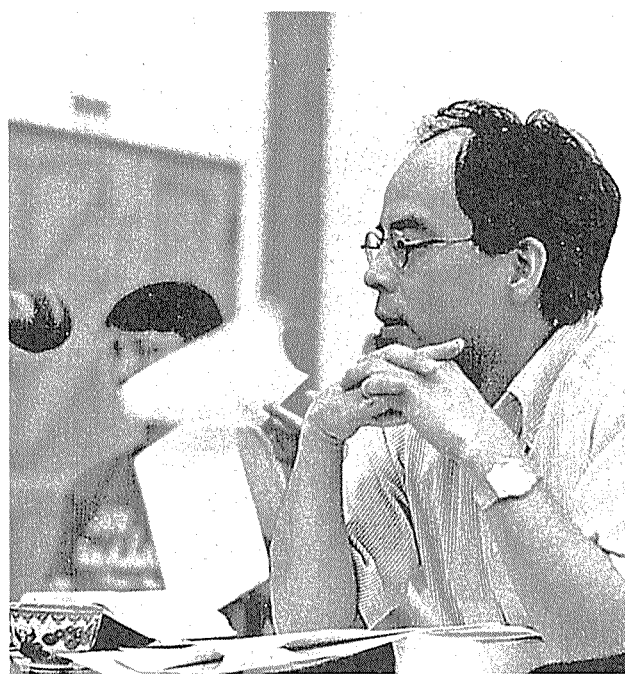
出版にも苦勞した。前任者の定年延長で教員ポストもあずけのままだったわたしに、アメリカ研究振興会の出版助成を仲介してくださったのは、国際基督教大学に移ってきておられた斎藤眞先生である。おかげで本書は念願の創文社から出すことができ、

アメリカ学会の第一回清水博賞をいただくことにもなった。

創文社にはその後も『アジア神学講義』人間に固有なものとは何か『アメリカ的理念の身体』とお世話になり続けたので、同社解散の報せはまことに悲しくて残念だった。久保井さん、売れない本ばかり書いてゴメンナサイ。

当時編集を担当してくれた小山さん(現知泉書館社長)によると、創文社で出したものをネタにして新しく書くこと必ず売れる、ということだった。その予言に違わず、新潮社から出した『反知性主義』は、トランプ大統領の出現というタイミングとも重なり、大好評となって今も重版が続いている。遠回しながら、少しでもだけ恩に報いることができたのかもしれない。

昔も今も、アメリカには体制や権力に対する異議申し立ての伝統が息づいている。今秋の大統領選挙がどちらに転ぶかわからないが、エドワーズに学ぶということは、そういうアメリカ精神の発展史の首根っこを掴まえるという作業でもある。



南アルプスの山荘で行われた研究会で(1994年)

もりもと・あんり 国際基督教大学教授。1956年、神奈川県生まれ。2012〜20年に同大学務副学長。専門は神学・宗教学・アメリカ研究。近著『反知性主義』(新潮選書)、『異端の時代』(岩波新書)など。

近況

『現代アメリカ講義——トランプのアメリカを読む』(一部執筆・東京大学出版会)が今月に上梓される。現在はエドワーズよりのさらに百年ほど遡り、良心の自由と政教分離の先駆者を主題にした『寛容の鍛錬——異形の初期アメリカ史』(仮題)を執筆中。年内に刊行の予定。